

筆した」(19 頁)と評する。だが、きわめて周到に文学上の装置を利用し、対話篇や回心物語を構成しているアウグスティヌスについて、この点についての論究が不足しているように思われる。また、本書の鍵となる「自己内対話」という概念についても曖昧な理解が残っていると思われる。一方では、これを内なる対話と規定しつつ、別の箇所では、より広義に「思考の企て」(124 頁)、「内的な談話」(198 頁)とも言表することで、読者を混乱させている。全体を貫く「自己内対話」について、テキスト上の根拠に基づいた理解がまず提案されるべきではないだろうか。したがって、本書にはいまだ仮説的な提案にとどまっていると見なざるをえない論述が残されており、ときに引用される脚注テキストがいかにも本論を補強しているか疑問を残す箇所があると思われる。とはいえ、アウグスティヌスが「霊的な修練」という古代哲学の所産をいかに展開したかについて、今後の研究のよりどころを確保し、多大な示唆を与えているという点は最後にあらためて強調されるべきである。

---

Robert Wisnovsky

*Avicenna's Metaphysics in Context*

Ithaca, New York: Cornell University Press, 2003, pp. ix + 305

---

小 村 優 太

本書はイスラーム的スコラ哲学の開祖とも言える、イブン・シーナー(980-1037: ラテン名, アヴィセンナ Avicenna) の形而上学を取り扱ったものである。著者が冒頭で「Amélie-Marie Goichon が 1937 年に *La distinction de l'essence et de l'existence d'après Ibn Sīnā (Avicenne)* を出版して以来、アヴィセンナの形而上学を専門に取り扱った、一冊の本となるほどの長さのまともな研究はなかった」と述べているように、確かにイブン・シーナー形而上学を専門的に取り扱った研究書としては半世紀以上ぶりと言えらう<sup>1)</sup>。本書は全体とし

---

1) 但し、イブン・シーナー研究そのものがなかったわけではない。D. Gutas, *Avicenna and the Aristotelian Tradition*, Leiden: Brill, 1988 や J. R. Michot, *La Destinée de*

て二部構成になっており、第一部が「アヴィセンナとアンモニオスの綜合」、第二部が「アヴィセンナの綜合のはじまり」と題されている。大きく分けると、第一部はアリストテレスからイブン・シーナーに至るまでの、主にギリシア哲学の流れ、第二部はイスラーム内部（とりわけイスラーム神学）からイブン・シーナーへの影響と、そこから展開されるイブン・シーナー形而上学を取り扱っている。著者によると、本書の主題は「魂とは何か。それは肉体に原因として如何に関係しているのか」と「神とは何か。それは世界に原因として如何に関係しているのか」の二つである。

第一部、というよりも本書全体を通して重要なのが、「アンモニオスの綜合 (Annmonian Synthesis)」という概念である。本書の冒頭で著者が説明するところによると、このアンモニオスの綜合には、アリストテレスの著作同士の矛盾点を調和させようという小さな調和と、アリストテレスとプラトンのあいだの矛盾点を調和させようという大きな調和の二つの段階があり、彼はこの哲学的潮流をアリストテレス註釈家アンモニオス (Annmonius Hermiae, 440-520) に因んで、アンモニオスの綜合と名付けている。アンモニオス自身の著作というものはほとんど現存していないのだが、アスクレピオス、フィロポノス、ダマスキオス、シンプリキオスといった弟子である註釈家たちの著作は現在にまで伝わっている（その中には、アンモニオスの講義録もあるという）。著者がここで「アンモニオスの」と言っているのは、このようなアンモニオスを祖とする大きな解釈史の潮流のことである。また第一部には、アリストテレスの「完全性 (ἐντελέχεια)」という概念が通奏低音のように流れている。著者はこれを『魂について』と『自然学』の二つの用例を挙げ分析してゆく。第一部には以下の章が含まれる：第1章「アリストテレス」、第2章「アレクサンドロスとテミスティオス」、第3章「プロクロス、アンモニオス、アスクレピオス」、第4章「プロクロス、アンモニオス、フィロポノス」、第5章「ギリシアからアラビア語への翻訳」、第6章「イブン・シーナーの魂論」。そこではギリシアからイブン・シーナーへと至る「完全性」の変遷が明らかにされてゆく。この潮流はまずアリストテレス『魂につい

---

*l'homme selon Avicenne*, Louvain: Aedibus Peeters, 1986 など。またイブン・シーナーだけを取り扱ったものではないが、H. Davidson, *Alfarabi, Avicenna, & Averroes, on Intellect*, Oxford: Oxford University Press, 1992 などがある。無論、Henry Corbin による（現代ではやや時代遅れの感がある）神秘主義的側面からの研究も存在する。

て』と『自然学』での *ἐντελέχεια* の使われ方を統合しようというアレクサンドロスなどの註釈家（小さな調和）から始まり、それらの用法と新プラトン主義的なものを統合しようというプロクロス、アンモニオスなどの註釈家（大きな調和）へと発展してゆく。この「アンモニオスの総合」が第一部の重要な要素である。それと同時に第一/第二の完全性という概念も、第一の完全性が「何らかの活動を行う能力」、第二の完全性が「何らかの能力をまさに発動させている状態」を指すアリストテレスの分類から、第一が「ものが存在するために必要なもの」、第二が「ものが良き存在であるために必要なもの」という新プラトン主義的の分類へと進化してゆく。イブン・シーナーの哲学観は基本的にアリストテレスのものを踏襲しているが、彼は完全性 (*kamāl*) の概念にこの両者の意味を含めることにより、アリストテレスの概念と新プラトン主義的の概念の統合者となったのである。

第二部は、イブン・シーナーへの、イスラーム神学者たち（とくにアシュアリー派とマートゥリーディー派）とファーラービーの影響と、そこからイブン・シーナーが作り上げた「アヴィセンナの総合 (Avicennian Synthesis)」を中心に取り扱っている。著者はイブン・シーナーを、哲学史の一つの転換点と考えている。つまり「アンモニオスの総合」はイブン・シーナーにおいて完成し、その後の哲学史は「アヴィセンナの総合」として発展していくのである。というのもイブン・シーナーの大きな源泉の一つ、ファーラービー (872-950) はプラトンとアリストテレスの総合を目指したという点でイスラームにおけるアンモニオスの総合の思想家であり、それとイスラーム神学的な概念を統合させることによって、より広範な「哲学と神学の融合」を試みたからである<sup>2)</sup>。第二部に含まれる章を見てみると、第7章から10章は「事物性 (*shay'iyyah*)」の概念にかんする問題を取り扱っており<sup>3)</sup>、「事物 (*shay'*)」、「存在者 (*mawjūd*)」、「本質 (*mā-*

2) Adamson はイスラーム哲学最初期のキンディー (873 頃没) の研究書にて、「キンディーは (Wisnovsky が指摘した「小さな調和」と「大きな調和」という) これらの試みを受け継いだだけでなく、さらに大きな、ギリシア思想と彼自身の文化と宗教との調和を試みた」ことを示そうとしている。P. Adamson, *Al-Kindī*, Oxford: Oxford University Press, 2007, 211, n. 2 を見よ。

3) そのうち7章から9章は、彼が2000年に書いた論文の加筆修正である。Cf. R. Wisnovsky, "Notes on Avicenna's concept of thingness (*shay'iyya*)," *Arabic Science and Philosophy*, vol. 10, 2000, 181-221.

hiyyah)」といった概念が、そしてかの有名なイブン・シーナーの「存在と本質の区別」が、いかにイスラーム神学の影響のもとに形成されたかを論じており、11章から14章では、「必然的存在 (wājib al-wujūd)」と「可能的存在 (mumkin al-wujūd)」, 「自らによる (bi-dhāt-hi)」と「他者による (bi-ghayr-hi)」という存在のマトリクスと、それに対する影響 (アリストテレス, ファーラービー, イスラーム神学) を検討している。

本書はイスラーム哲学のみならず, ギリシア哲学の研究対象として有名な分野を扱っており, その点で読者の興味を限定する惧れはない。しかし著者の研究姿勢にはいくつか特筆すべき点がある。まずイブン・シーナー研究として, ギリシア方面ではアリストテレス註釈者や新プラトン主義者, イスラーム方面では神学者の影響を考慮に入れている点。確かにイブン・シーナーは新プラトン主義的アリストテレス哲学者であるが, アリストテレスとイブン・シーナーのあいだには1300年の隔たりがあることを忘れてはいけない。著者はこの点を明確に意識し, アリストテレスとイブン・シーナーを単純に比較する態度を批判しながら, 新プラトン主義者やイスラーム神学の著作の分析に紙面を割いている。とりわけイスラーム神学からの影響はこれまで見過ごされる傾向にあったため, この意義は大きいと思われる<sup>4)</sup>。もうひとつ, イスラーム哲学研究全般について, イスラーム哲学それ自体として研究されるべきということを指摘している点。これは, ギリシアの哲学はイスラームに伝播したが, それは単なる通り道であり, その遺産をいくらかすり減らしてヨーロッパに手渡したに過ぎないとする西洋人に多く見られる態度でも, イスラーム哲学は完全に独創的であり, それ以降のヨーロッパ哲学はイスラーム哲学にすべて源泉があるとする態度でもなく, より曇りのない目で対象を捉える態度である (彼はそれを文脈主義 (contextualism) と呼んでいる)。その証拠として, 本書では可能な限り, アリストテレスやその他のギリシア哲学テキストの引用は, ギリシア語原文でなく, アラビア語訳のテキストから引かれている。なぜならイブン・シーナーが読んだのは, アラビア語訳されたアリストテレスであったのだから。題の「文脈における (in Context)」は, まさ

---

4) 但し著者も紹介しているように (p. 145), イブン・シーナーにたいするイスラーム神学の影響はすでに Jolivet によって指摘されている。Cf. J. Jolivet, "Aux origines de l'ontologie d'Ibn Sinā," eds. J. Jolivet and R. Rashed, *Études sur Avicenne*, Paris: Les Belles Lettres, 1984, 11-28.

にそのようなことを意味するのだらう。イブン・シーナーの研究書はこれまでに数多く出版され、本書もその一冊に過ぎない。但し著者の言う「文脈主義」、その哲学が語られた文脈に即して見つめ直すという姿勢は、イスラーム哲学研究のみならず、今後の中世哲学研究において欠かすことの出来ないものであろう。その意味で、本書はイブン・シーナー研究、さらにはイスラーム哲学研究を大きく前進させる契機を我々に提示してくれたと考えられる。

---

Morimichi Watanabe

*Nicholas of Cusa - A Companion to his Life and his Times*

Edited by Gerald Christianson and Thomas M.

Izbicki, Ashgate, 2011. xxxii + 381, Fig. 7, Maps 3

---

矢 内 義 顕

美しい装丁の本である。表紙の中央を飾っているのは、われわれがよく目にする聖ニコラウス・ホスピタルの祭壇画として描かれた枢機卿クザーヌスの肖像ではなく、バウハラッハ教会のワインの課税をめぐる紛争（1426年）に関して、法律意見書を執筆する若き教会法学者クザーヌスの肖像である。それは、クザーヌスを哲学者、神学者としてよりも、政治思想家、教会法学者、教会改革者として理解することを主要な目標としてきた、政治・法思想史の研究者である渡邊守道氏の出発点を意味する。

著者について簡単に記しておこう。渡邊守道氏は、1926年に山形で生まれ、東京大学法学部卒業後、渡米する。プリンストン大学で政治思想史を学び、1961年にコロンビア大学で博士号を取得。1963年にロングアイランド大学の准教授となり、2009年に退職するまで同大学の教授をつとめた。1983年から American Cusanus Society の会長となり（-2008年）、翌1984年から American Cusanus Society Newsletter (ACSN) の編集・発行に携わり、アメリカのみならず世界のクザーヌス研究を導いた。この間、日本でも東京大学、慶応大学などで客員教授をつとめ、日本クザーヌス学会の顧問でもあった。